

■ 掲示板

□ 国内外の関連会議情報

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開催方法が変更になっている可能性があります。
ご参加を予定している場合は、主催元のホームページ等で最新の情報をお確かめ下さい。

開催期間	行事名	開催場所	関連ウェブページ
2022 年			
6/12-17	IPAC22—The 13th International Particle Accelerator Conference 2022	Bangkok, Thailand	http://www.ipac22.org/
7/7-8	第14回核融合エネルギー連合講演会	オンライン開催	http://www.jspf.or.jp/14rengo/
8/8-11	第19回日本加速器学会年会	北九州国際会議場	https://www.pasj.jp/dai19kainenkai/index.html
8/18-26	第16回 大学生のための素粒子・原子核スクール サマーチャレンジ	オンライン開催	
8/22-26	FEL2022—The 40th International Free Electron Laser Conference	Trieste, Italy	https://www.fel2022.org/
8/28-9/2	LINAC2022—The 31st International Linear Accelerator Conference 2022	Liverpool, UK	https://www.linac2022.org/
9/11-16	IVC 22—The 22nd International Vacuum Congress	札幌コンベンションセンター	https://ivc22.org/
2023 年			
5/7-12	IPAC23—The 14th International Particle Accelerator Conference 2023	Venice Lido, Italy	https://www.ipac23.org/
6/25-30	ISDEIV2023—30th International Symposium on Discharge and Electrical Insulation in Vacuum	沖縄県市町村自治会館（沖縄県那覇市）	http://isdeiv2023.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.html

■ 会告

■ 第34回日本加速器学会評議員会（臨時開催） 議事録

日 時：2022年2月8日（火）13:00-15:00

場 所：国際文献社会議室 ウェブ会議（Webex）

出席者：羽島 良一（会長／量子科学技術研究開発機構）、宮本 篤（広報幹事／評議員／東芝エネルギーシステムズ(株)）、柏木 茂（編集幹事／評議員／東北大学）、加藤 龍好（庶務幹事／高エネルギー加速器研究機構）、仲井 浩孝（行事幹事／高エネルギー加速器研究機構）、長谷川 和男（会計幹事／量子科学技術研究開

発機構）、岩下 芳久（京都大学）、大垣 英明（京都大学）、帯名 崇（高エネルギー加速器研究機構）、上垣外 修一（理化学研究所）、神谷 幸秀（高エネルギー加速器研究機構）、金正 倫計（日本原子力研究開発機構）、栗木 雅夫（広島大学）、黒田 隆之助（産業技術総合研究所）、小磯 晴代（高エネルギー加速器研究機構）、小関 忠（高エネルギー加速器研究機構）、小林 幸則（高エネルギー加速器研究機構）、坂上 和之（東京大学）、佐藤 潔和（東芝エネルギーシステムズ株式会社）、徳地 明（株式会社パルスパワー技術研究所）、飛山 真理（高エネルギー

ギー加速器研究機構), 中村 剛 (高エネルギー加速器研究機構), 早野 仁司 (高エネルギー加速器研究機構), 古川 和朗 (高エネルギー加速器研究機構), 増澤 美佳 (高エネルギー加速器研究機構), 湯城 磨 (スカンジノバ・システムズ株式会社), 鷲尾 方一 (早稲田大学)

オブザーバー: 田村 文彦 (日本原子力研究開発機構), 紀井 俊輝 (京都大学), 原田 寛之 (日本原子力研究開発機構)

議 事:

0. Webex 会議にて開催し, 音声に問題なく議事進行に支障がないことを確認した。また, 定足数を満たしていることの確認が行われた。

1. 仲井行事幹事より, 第19回年会の開催方法について現地または, オンラインのどちらにするか審議依頼があった。第19回年会 (PASJ2022) は, 池田組織委員長, 諏訪田プログラム委員長, 若狭実行委員長, 九州大学加速器・ビーム応用科学センターのスタッフが, 北九州国際会議場における現地開催を前提として準備を進めている。過去2回の年会がオンライン開催であったことから, 今年の年会では対面で交流する機会を望んでいる会員が多いと考える。特に, 若手会員にとっては, 他者と直接議論することがキャリア形成に不可欠であり, 現地開催を期待する声大きい。企業所属の評議員からも, 現地開催があれば企業展示を出展したいとの意向が示された。

その一方で, ポスターセッションで「密」が避けられないとの懸念が示され, 年会で感染者が出た場合の責任問題を危惧する意見もあった。

評議員会としては, 現地開催が望ましいとの考えを支持するが, 不確実な予測に基づいて「現地開催」を決定することはできず, 以下の方針としたい。

- ・現地開催を前提として, サーキュラー配信, 発表申込の受付, プログラム編成など準備を進める。
- ・ただし, サーキュラーでは「オンライン開催に変更となる可能性がある」ことを明記する。
- ・福岡県, 北九州市, 北九州観光コンベンション協会が定める, 感染防止のためのガイドライン, チェック項目等を遵守した上で, 開催準備を進める。
- ・4月の評議員会にて, その時点での状況を精査した上で, 再度の判断 (場合によっては方針変更) を行う。

- ・4月の時点で「現地開催の方針」となった場合でも, 感染症の状況を継続して注視し, オンライン開催へ切り替える選択肢は排除しない。
- ・開催の1か月前 (7月上旬) を最終判断のタイミングとする。この時点で, オンライン開催に切り替える場合は, 必要な準備期間を設けたるために年会の開催日を後ろへずらすことも認める。
- ・4月以降にオンライン開催に切り替えた場合, 現地開催の準備に費やした支出の一部が返金されないことは承知している。準備に必要な支出は, 学会予算で手当とする。
- ・現地開催とオンライン開催で年会の参加費が変わることを考慮して, 参加費の徴収は7月上旬以降とする。
- ・オンラインでの研究発表, 研究交流は, 現地開催とは違ったメリットがあり, 今後の学会活動に活用できる。したがって, 年会開催方法の如何に関わらず, 研究発表, 研究交流のためのオンラインのプラットフォームやツールについて, 情報収集を行っておくことが望ましい。このため, 行事委員を中心に協力者を募り, 情報収集のチームを立ち上げる。国際文献社 (年会ヘルプデスク) からも, 他学会でのオンライン開催の実績について, 情報提供いただく。
- ・年会がオンライン開催となった場合は, 九州大学の実行委員に加えて, 上記の情報収集チーム, 年会ヘルプデスクに協力を仰ぎ, 開催にむけた準備と実施体制を整える。

続いて, 仲井行事幹事より第21回 (2024年度) 年会の開催地の審議依頼があった。開催地は第33回評議員会で, 松山が承認されていたが, 組織委員長, プログラム委員長, 実行委員長に就任いただける会員が確保できず, 実施体制が整わない見込みである。そこで, 2025年度以降の開催を快諾いただいていた山形大学の想田光氏に第21回年会の対応が可能か確認し, 了承を得ることから, 山形への変更が承認された。

2. 加藤庶務幹事より, 会長・評議員選挙について, 選挙管理委員会で2点の問題が提示されたことが説明された。1点目は予備選挙後に辞退者が出るために票が無駄になってしまい, その分の会員の民意を反映できないこと, 2点目は投票率が3-4割程度にとどまっていることである。

辞退者は職務状況や個人の都合もありやむを得

ない。辞退者をなくすためには、予備選挙の前に被選挙権のある全会員を対象に辞退確認をする等の案が出た。投票率は、学会運営に関心がないか、判断材料のない場合に投票を敬遠する傾向があると予想されるため、総会にて投票呼び掛けを行う、運営面での課題を会員に共有する機会を設けることで学会運営への関心を高めることが有効ではないかとの意見があった。選挙に関しては、継続して審議することになった。

羽島会長より、他の議題がないか確認があり、特に意見が無かったため散会となった。

■第10回幹事会のお知らせ

第35回評議員会にて、第10期幹事会が以下の

通り決定しました。

会長 栗木 雅夫
広報幹事 田村 文彦
編集幹事 川瀬 啓悟
庶務幹事 紀井 俊輝
行事幹事 原田 寛之
会計幹事 三浦 孝子

■会員移動（2022年1月～2022年3月）

〔個人会員入会〕

白澤 克年（住友重機械工業(株)）

〔個人会員退会〕

25名

■編集後記

この春、学会誌「加速器」の編集幹事をQSTの川瀬さんへバトンタッチすることになったので、今回で2回目となるが編集後記を担当させて頂くことにした。2018年4月から編集幹事を務めさせて頂いたが、いつも私の最終校正が遅れて毎回バタバタの状態での校了だった。今思い返しても、学会誌編集事務局の高橋さんや編集委員の皆さんには、迷惑をかけっぱなしの4年間だった。

私が編集幹事になってから学会誌の編集でそれまでと変わったことが幾つかある。この編集後記が委員の持ち回りで学会誌に掲載されるようになったのもその1つであるが、一番はWebでの学会誌バックナンバーの公開方法が変わったことだと思う。2018年8月から、それまで会員にしか公開していなかった学会誌の記事を、発行から1年を経過した記事は会員・非会員関係なく閲覧可能とし、1年未満の記事であっても編集委員が推薦するものは非会員でも閲覧できるようにした。この公開方法に変更した次の年から、広報委員会にも手伝ってもらってダウンロード数トップ10を年会で紹介することにした。上位には、加速器自体の開発に関するものよりも加速器利用に関するものが多くランキングした。おそらく、会員は送られてくる紙媒体の冊子に目を通し、Webで閲覧するのは非会員の人達の方が多かったのだと推測する。そして、2021年より学会と社会をつなぐプラットフォームとしてJ-STAGEの活用を開始

した。それぞれの記事にDOIが付与されるなど、永久的な管理といった面ではJ-STAGEを利用するメリットは大きい。現在のところ、15巻2号以降の記事がJ-STAGEに掲載されている。2022年度中には創刊号から全ての学会誌が掲載される予定であるので、会員の皆さんには是非活用して頂けたらと思う。

私にとってこの4年間で一番思い出に残っているのが、17巻4号の特集号「大強度不安定核ビーム」である。電子加速器を専門にしている私にとって、正直、この特集号はわからないことだらけで、最初は「不安定核ってビームになるの?」というレベルだった。最終的には、編集委員の加瀬昌之さん(理研)をはじめとする編集委員の方々の大変なご尽力によって、国外の研究機関の方にも4編の記事を書いて頂き、全部で9編の大作となった。更に、他学会との交流として日本物理学会でも不安定核ビームをテーマにシンポジウムを開催することができた。編集幹事の務めは、自身の業務に取り組む時間をとられたり大変な面もあったが、自身の専門外の人達とも沢山交流でき、多くの刺激をもらえたことは本当に良かったと思う。会員の皆さんには、手元に学会誌が届いたときに自分の専門外の記事にも積極的に目を通して頂けたらと思う。今まで知らなかった、何か新しい発見があるかもしれません。

東北大学電子光理学研究センター
柏木 茂